

### 第3回実践事例研究会

「友達ってええなあ：心の通い合うクラスづくり」(水原浩一編著、ぱすてる書房)をめぐって

話題提供者 センター協力研究員(1999年度)(吹田市立山手小学校教諭) 水原浩一

1999.9.18

大阪から来ました水原です。今日お話をさせていただくのは、3年前に担任をした5、6年生の2年間とその前の年の5年生の1年間の僕のクラスの中で実際にあった「いじめ」問題にどう取り組んだのかということです。自分のクラス内のいじめに全く気づかなかった経験と、その反省から新たな高学年の担任として、子ども達の建前と本音にこだわり、自分の思いが素直に出し合えるクラス作りをめざして再スタートを切りました。

新5年生に一人の女の子がいました。その子のことをめぐって、女の子達が本当に彼女を支えようという建前と本音に揺れながら、又、時には彼女に関わることをスパッと割り切ってしまう。そんな子ども達の絡み合いや僕が絡み合っていく中で、『いじめ』を真正面に据えて取り組み、最後には、それなりに卒業させていった。そんな話をしたいと思っています。

その取り組みを話す前に、前年度の5年生の時、実際にクラスの中にいじめがあったにもかかわらず、全く気づかなかった苦い経験をお話したいとおもいます。夏休み明けに体調を崩して一週間ほど入院をしました。職場に復帰したその日にある子のお母さんから、『うちの子、いじめられて学校へいけないんです。』と言われました。早速、子ども達に聞いても『そんな知らんわ。』としか言わないし、当然、そのいじめられている子が学校には来ていないので、事実を確かめられませんでした。今度は、お父さんが来られましたが、お母さんの時と同じく『ない。とも言えないし、ある。ともいえません。』こんな曖昧な返事しかできずに、帰っていただいたというすごく苦い経験をしました。それからは、子ども達にはその都度対応して、いじめの事実があるかを見守っていましたが、全然そんな様子がないんですね。そのいじめられているという子も、一応は学校には来るようにはなりましたが、『学校はイヤだ。』とは言うけれど、いじめについては口は開きませんでした。一ヶ月ぐらいたったある日、図工の時間に校区の写生をしました。いじめているという子といじめられているという子も同じグループ6人で写生をしていました。その時も全く変わった様子がありませんでしたが、その日の放課後、3人の子

もが相談にきました。3人の子が言うには、グループ分けの時、いじめているといわれている子が自分勝手なことをしたらしくて、みんなから避けられたようで、誰も一緒に組んでくれる子がいなかったようです。そこで力づくで一人の子を引き込み、無理やりにグループに入ってきたらしいです。そのことから、やっぱり何かあると思いました。最初は話を聞いてもなかなか口を開こうとしないし、あまりにも、ふてぶてしい態度だったので、思わず、手を一発出してしまいました。その時やっと、いじめているといわれている子が自分がみんなから外されたことや自分の思いを言ってくれました。そこで、事実関係を確かめようとしたのですが、やられている側の子が自分がやられていることを認めないんです。他の子ども達もある程度のことには知っているし、『僕らのことは言わんといて。』と教えてくれた3人の子のことも隠したままでしたが、ある程度話を進めていくうちに、いじめの事実がどんどん明らかになっていきました。この時、自分は全く子どものことをみていなかったことを思い知らされました。自分は同和教育に関わってきたという自負心が強すぎて自分のクラスの中のいじめを認めなかったことや子どもの関係を見誤っていたことに気づかなかったことなど、いくら反省しても足りないくらいの過ちをしてしまいました。ちょうどその頃、愛知県で大河内君のいじめ自殺事件が起きました。僕自身にも子ども達にも、いじめ問題を真剣に考える機会になればと思い、新聞の切り抜きを使ってみんなで考えました。クラスの子ども達は真面目に考えてくれました。でも、いじめの当事者である子ども達は、あまりふれて欲しくないようで、ほとんど話しませんでした。僕との個人的な話だと、いじめている子もいじめられている子も自分の思いは話してくれましたが、学級会になると一切口を開こうとせず、みんなで取り組むことがうまく進みませんでした。それでも、いろんな教材を使ったり、詩を活用したりしながら、かなり強引な形で問題を解決しようとしてしまいました。今考えてみると、僕の思いばかりが先走り、子ども達の気持ちを汲み取れないまま過ぎてしまった半年間だったようです。自分で自分を追い詰めてしまい、悩

むことが多くなりました。教師を辞めようかなと思うほど自信を失っていきました。そんな時、一人の女の子が自分の思いを知ってほしいと原稿用紙4枚ぐらいに書き綴ってきてくれました。それだけでなく、いじめなどクラスで何かあった時に知らせ合う目安箱みたいなものも作ろうと提案してくれました。あまりにも自分の意見や考えをクラスのみんなの前では出さない友達にも、言いたいことがあればはっきりと言ってほしい。そんな思いをぶつけてきました。いじめに対して曖昧な態度でいる男の子に殴られてもいいから、「あかん事はあかん。」と言っていきたい。そんな思いをどんどんエスカレートさせていく彼女に、いくらしんどくても付き合っていくしかないと思っていました。そんな時、たまたま一学級減になりました。自分としては持ち上がるつもりでしたが、再び、5年生の担任としてやり直すことになりました。

新たに5年生のスタートをきった時、クラスの中で何かが起これば、子ども達はまわりの状況に縛られて、自分の本音が言えなくなってしまう。教師が強引な形で指導をすれば、子ども達はばかりか自分自身を追い詰めてしまう。こんな経験を繰り返さないためにも、とにかく、気負うことなく言いたいことは何でも言える関係を作ることが大事だと思いました。子どもの気持ちを大事にして、子どもの話を聞くこと。子ども達の問題は子ども同士の中で考えさせることを重視するなど、自分のスタンスを変えてみました。4月はゆったりとしたスタートが切れました。ところが、5月の連休明けに女の子が転校してきました。その子は自分の言いたいことははっきりと言える子でした。すごくありがたいなと思って期待する半面、その子が絡むトラブルが一番心配でした。心配はすぐに現実のものになりました。その子が算数の授業中に隣の男の子に『答えが間違ってる。』と指摘したことから、小競り合いになってしまいました。そこからその子が関わったトラブルが始まり、でしゃばりだというマイナスイメージがクラスの中に広がっていきました。ある時、彼女の名前を語った偽のラブレター事件が起こりました。サッカー部の一部の男子達がクラス中に面白半分に囁き立てたようです。当時、学級活動として新聞作りや集団遊びを取り組んでいましたがその新聞にそのことを書こうとした子もいたらしいです。彼女は血相を変えて『先生に言いたいことあるねん。もう、めっちゃ腹立つわ。』と訴えにきました。早速教室に上がり話を聞きました。茶化した子ども達は素直に誤りを認め謝ったのでよかったんですが、自分の名前を語ったに違いない女の子達は全く何も発言しなかったの、彼女の怒りは収

まりませんでした。彼女の悔しかった思いを確認して、気持ちを収めてもらう形でしか取り組みませんでした。自分の思いを素直に表現できない子が多かったので『気持ち探し』という取り組みをしました。6人ぐらいのグループでどんな時にどんな気持ちになったことがあるかを話し合いました。そうしたら、ほとんど自分の気持ちや思いを話さなかった子ども達が今までの嫌だった思いを出してきました。1年生の時、おばあちゃんに買ってもらった革のランドセルを『ぼろや。』と言われたことに傷つき、悔しかった気持ちを涙をぼろぼろ流しながら話してくれた子がいました。すると、あちこちから、様々な辛かったことを話す声が聞こえてきました。マイナスの経験だけでなく、うれしかったことなどのプラス経験も話せるような機会を作ろうとしましたがなかなかうまくいきませんでした。子ども達は嫌なことを言われたことやされたことは表現しますが、子ども達の世界ではプラスに評価し合うことはほとんどないようでした。特に、女の子達は言いたいことがいっぱいあるにもかかわらず、ほとんど自分の思いを出し合わないようでした。一学期はとにかく子ども達の中にあるものを素直に出せるように取り組んだつもりでしたが、うまくいきませんでした。自分の思いを素直に出さない子ども達の間関係の希薄さに問題の核心があるんだなあと感じながら夏休みをすごしました。

二学期になって間もないある日、息子が愛読している週刊誌に「いじめ・いじめられた体験記」が連載されていました。それを題材にして授業をしました。子ども達は漫画の本が教材になったことでとても新鮮に感じたようですごく食いつきがよかったです。さらに「いじめりポート」という本を2冊購入し、自由に閲覧できるようにしたんです。多くの子ども達には、すごくインパクトがあったようで中には、自分の体験とだぶらせた子もいました。ある漫画好きな子がいて、その子が自分のいじめた体験を漫画で表現しだしました。その子達のグループに刺激されたのか、漫画作りをする子ども達のグループがあちらこちらでできました。3人の女の子達の漫画作りがあつという間にクラス中に広がり、自分達のいじめ体験や親達のいじめについてのアンケートをするなど、子ども達はものすごいエネルギーで動きだしました。子ども達のそんなパワーで「友達ってええなあ」という冊子ができました。ところが、クラスみんなで漫画作りをしていた真っ最中にクラスの中でいじめが起こっていました。お楽しみ会の劇でのいじめられる場面をもじったいじめでした。いじめた側の子ども達の言い分は、「劇の演技の練習だ。」ということでしたが、実際にはや

られた子はその劇のメンバーではありませんでした。早速、話を聞いてみました。すると漫画作りを一緒にしていた時にいろいろなことがあったようでした。いじめた側の子ども達にとっては、自分達の言ったことがなかなか通じなかったことがたびたびあったようで、その時の鬱憤をはらすような軽い気持ちでやってしまったようでした。ところが、いじめに気づき、指摘した子といじめた子ども達はとても仲がよかったですごく悩んでしまいました。あんなにも真剣にいじめをみんなで考えたのに、自分のクラスのことになると素直にものが言えなくなってしまう事が本当の問題なんだと思いました。僕が問題提起をすれば、子ども達は話し合いをしたいと思います。でも、当事者である子ども達が口を開くことが大事だと思ったので、いじめを指摘した子やいじめた子ども達の気持ちを考えて、しばらくは待ちました。一週間ほどしてから、みんなで話し合ってもかまわまいと言ってくれたので、話し合いました。あまり時間は取りませんでした。子ども達は親に知られることをとても気にしていましたが、親には知らせました。いじめた側のお母さんはショックだったようですが、僕としてはそんなにも悪質なものと思っていませんでしたし、子ども達の間を考慮するあまりに、ほっておいたら、まわりの子ども達には二人の子がいじめたという事実だけが残ってしまうので、子ども達には、いじめっ子というレッテルだけは絶対に貼らせないような配慮だけは十分にしておきました。結果は話し合いをして良かったです。この取り組みをしてみてもわかったことは、子ども達は、いじめはいけないこと。いじめは見過ごしてはいけないことはわかっています。でも、自分がいじめに関わった時に自分の意見や思いを素直に出せなくなってしまう、いけないことと知りつつ、知らんふりをしてしまうことが深刻な問題だということです。だから、僕の方から、(1)正しいことは正しいと言い切れること。(2)誰にも気兼ねすることなく、言いたいことが言い切れること。(3)みんなが対等な関係でつき合えること。この三つのことを大事にしてクラス作りをすることを確認して学級会の幕を下ろしました。

6年生は、この三つのことを達成することを最初に確認して、クラスの目標は子ども達に決めさせてスタートを切りました。子ども達の中には、いじめ問題を考えようという気持ちがすごくありました。ある子が「先生、いじめって、なくせるのかな。」と言ったことをきっかけに、はじめての参観日に、「いじめはなくせるか？」というテーマで話し合いをしました。「なくせる。」「なくせない。」それぞれの側に立って話し合いました。子ども達は

いっぱい意見を出しました。お母さん達も意見を出してくれました。いじめた経験のある子の気持ちもケアしながら、結構、いい雰囲気できました。

ところが、5月のはじめにいじめがあるから話し合っしてほしいという声があったので、学級会をしました。このことは大したことではなかったんですが、その学級会后、全然関係のなかったある子が「明日から学校に来たくない。」と泣いて訴えてきました。その原因を作ったと言われる5人の子ども達が、また、自分達のことが学級会で言われると思ったらしくて、お互いに電話を掛け合っって話の帳尻を合わそうとしていたようでした。子ども達は自分の思いを素直に出そうと思う半面、出したことによって跳ね返ってくることへの不安で、自由に自己表現できなくなっていました。特に、女の子達はグループ内のポジションが気になってしまい、自分の気持ちが振り子のように揺れ動いていました。そんな女の子達の人間関係の揺れ動きには、必ずと言っていいほど、Aさんが関わっていました。Aさんは偽のラブレターを出されたことがどうしても引っ掛かるようで、女子集団の中での自分のポジションを確保することにとっても気がつかっていました。放課後は、塾通いをする事が多くて、どうしても友達と語り合う時間がとりにくいようで、何かとまわりの友達には気を配っていました。泣いている子がいれば、必ず、声をかけたり、親切に接しているようでした。僕の理解を越えたところでは自分の考えで行動することがとても困難な雰囲気が女の子達の中に漂っていたんです。

そんな雰囲気の中、Bさんが学校に来にくくなってしまいました。彼女は、どちらかと言えば、グループに属して行動するタイプではなくて、男女の区別なく誰とでも付き合えるタイプの子でした。3日後になって、やっと、母親に自分の気持ちを打ち明けました。僕としても、出来る限り負担のないような形で話をしました。一応、「明日からは学校へ行けそうだ。」と言ってくれたので、登校することを勧めました。でも、また、学校に来れなくなりました。彼女にとっては、グループに属しないと自分の存在が感じにくい。でも、グループに属してしまうと自分がまわりに振り回されてしまうことに耐えられなくなってしまうようでした。みんなが自分のことをどう思っているのかという不安が登校することを躊躇させてしまうようでした。いくら、僕が彼女の思いを知っても、子ども達に伝えなければ何も解決しません。揺れ動くBさんに、『先生がいくらわかって、友達同士の中で分かり合えなかったら、いつまでもしんどいから、思い切っって自分の思いをみんなに伝えてみたら？先生も応

援するから。』こんな励ましをしました。彼女の思いが通じたのか、何人かの子が声をかけてくれるようになったようでした。グループの中にはうまく入れるようにはならなかったようでしたが、一定の人間関係は作れたようでした。ちょうど、その頃に児童会行事の準備のため、淀川にカニ取りに行く計画をしました。Bさんも何とか元気に参加しました。男の子と女の子の人間関係も出来だし、少しずつですが、自分の思いをみんなの前で出せる雰囲気もできだしました。Bさんも不登校にはなりません。子ども達はクラスの中で疎外感を感じている子やいじめられて仲間に入れられないしんどい立場の子を放っておくことはできない事もわかってくれたようでした。まだまだ、本音の部分と建前の部分が混ざり合いながらも、少しずつですが、子ども達は真剣に考えを出し合うようにはなっていました。

二学期は子ども達の最大の楽しみである修学旅行がありました。新幹線の座席や宿舎の部屋割りが気になるんですね。子ども達は自分達で決めたいんですね。『自分達で決めたい。』こんな声は当然でした。少し懸念がありました。子ども達の要求を認めました。案の定、気に入った者同士がさっさと決めてしまい、残された者同士がくっついていく。そんな決め方がされてしまいました。今まで、学級会で確認してきたことが全く生かされませんでした。でも、子ども達もまんざらでもありませんでした。個人懇談会の時、今まで、学級会ではほとんど自分の意見を言わなかったCさんが、お母さんに修学旅行のことで、自分達で決められたことについては賛成だったけど、Dさんが仲間外れになってしまったことを心配していたことが分かりました。Cさんは、一部の者が好き勝手に自分達で決めたことに納得できない気持ちとそれをみんなの前では言えない自分との葛藤で悩んでいたようでした。Cさんは自分だと分かってしまうことには抵抗があったようでしたが、頑張って、学級会で問題提起をしてくれました。Cさんの問題提起を受けて、Dさんは自分がグループになかなか入れてもらえなかったことを訴えました。Cさんに同意できる何人の子も達がグループの作り方に恣意的なことがあったことを明らかにされました。Dさんのことを考えながらみんなで決め直すことになりました。一応、修学旅行のグループは子ども達の手で決めた形になりました。でも、子ども達間の思いのズレは確実に大きくなっていきました。今までの学級会では、『誰でも受け入れて、認め合うのは当たり前やんか。』そんな建前論でどんどん進んでいき、一時的にはいい関係にはなっているように見えました。でも、本音の部分では、逃げ腰になってしまい、自分の思いを

出さない。だから、本音と建前の中で揺れ動き、悩みだす子が増えだしました。以前には、Dさんのことを仲間として受け入れるべきだと言って支える側に立っていたEさんが今度は、『Dなんか、クラスにいないほうがええやんか。』と言いだす。それを『そんなこと言ったらあかんのとちゃうの?』と言うと、『だって、ほんまはあんたかて嫌ちゃうの?』と切り返されてしまうと支える側の子も達は言葉を詰まらせてしまう。本音と建前の間を振り子のように揺れる気持ちが交錯する中で、きれいごとだけでは人間関係は作れないと思っている本音を出しにくいと思っている子ども達が、先生なんか抜きにして、自分達だけで本当の気持ちを出し合って話し合うべきだという主張を通していきました。そんな中で、女の子達だけの話し合いを認めました。3時間目から6時間目まで続けました。Dさんを支える側の7人の子も達にはきびしいものだったようです。学級会では本音と言えないと感じている子ども達にとっては、学級会でDさんのことを支えるべきだと問題提起をする子ども達は先生の支持をたよりにした上での建前論の言い合いをしているだけのように感じていたようでした。本音を出せないと感じている子ども達にとっては、Dさんを支えようとしている子ども達の建前論には批判的で『CさんらはDさんを利用してただだ。』とか『このクラスの女の子は影でコソコソやるから嫌いや。』こんな風評をクラスで流していたようでした。話し合いの途中で、僕に話の中に入ってほしいとDさんを支える側の子も達から要請がありました。僕の前では、AさんやEさんはクラスで言いふらしたことは謝りました。でも、Dさんが外されることについては、3人がいたら、誰の時だって、2対1になるのは当たり前だし、修学旅行のグループ分けのこともみんなで決めたことで仲間外れなんかしていない。という結論で一致したようでした。自分達だけでは、Dさんをきちんと支えきれず、いつも、決まった後で、先生に頼っていく形でしか問題提起をできない子ども達とそんな提案を受けて学級会をいくらやっても、いい方向にはいかないと思いました。少し冷たいようでしたが、Dさんを支えようと思っている子ども達には、学級会の時、僕に頼ることなく、自分達の意味としてDさんを支えるとしっかりと意思表示をするように言いました。女の子だけの話し合いの結論がこんな程度だったことに対して、男の子達からは、『今まで、何を話し合ってきたのか。』とか『こんなことやったら、もめることなんかないやん。』といった批判がでました。男の子達の批判が自分達の方に向いているとは思わないAさんやEさんは、Cさん達の声しか受け止めない僕の対応にも不満の声を上げまし

た。『先生は何でDさんの時だけ学級会をするのか。先生はDさんのことをいじめられていると言いきる。』僕には予想もしていなかったことでした。でも、Aさん達は、『Dさんに対しては絶対に差別とかはしていない。』と言い切ってくれたことは、本音か建前かは分かりませんが、その言葉だけは信じることを告げました。僕は、みんなの前で、Aさん達がDさんのことを仲間外れにしていると思っていたことを謝りました。子ども達はDさんのことについては本音と建前を揺れ動きながらも、みんなが仲間として受け入れようとしているんだ。ということだけは確認して学級会ではもう話題にしないことにしました。

三学期の卒業遠足は、Dさんは外されることなく男女混合の11人の大グループの中に入っていました。小学校で一番最後の席替えの時、Aさんが『自由にさせて。』と言ってきました。僕はそれでもいいと思いました。でも、男子達が今まで通りでいいと言い切ってくれたので、くじ引きに決まりました。2年間、こんな風な形で子ども達には、「いじめ」とかクラスのいろんな問題に目をむけながらクラス作りをやってきました。自分達で考え、自分達の思いが素直に出し合える、そんな雰囲気だけは作りたいなあと思ってやってきたつもりでした。多少は言えるような関係はできたかなと思いますが、実際に当事者になると個人的には教師には言えてもみんなの前では

なかなか言えない。そこが2年間かかってもううまくできなかったと思います。

最後に、2年間子ども達と「いじめ」を真正面に見据えてクラス作りをしてきて思ったことは、いじめ問題を考える時、「自分のクラスに限ってそんなことはない。」なんて思わないほうがいいと言われますが、正直言って、実際に自分のクラスのことになるといじめの事実があることを認めることって、本当に難しいことだなあということ。いじめを解決しようと思ったら、まず、子ども達の中で何か起こった時にきちんと事実確認ができる関係が絶対に大事です。自分の思いが素直に出せないような子ども達の間関係の希薄さがあると、事実がはっきりしないまま事態だけが進んでいき解決の糸口ができなくなってしまいます。そんなクラスでは、教師の正論だけがスーと流れるだけで、子ども達の中には何一つも残らないと思います。どんなことでも言い合える雰囲気を作っていくと、子ども達の間関係の中で良いことも悪いこともいっぱい出てきます。クラスの中でいろんな事が起こった時、なぜ、そんなことが起こったのか？ということ子ども達に考えさせること。そして、先生も子ども達と一緒に悩みながらも、地道につき合いながら、首を突っ込んでいくこと。そんなスタイルで先生と子ども達が繋がっていけば、クラスの中でいじめが起こったとしてもひどくはなっていないだろうと思います。